

氏名	郭 芝綺 (カク ズチィ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第 12 号		
学位授与日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	<b>失われた空間の記憶を求めて</b> <b>－ 《天橋立図》 にみる室町期丹後府中の</b> <b>都市空間に関する研究－</b>		
審査委員	主査 教授	島 尾	新
	副査 教授	李 禹	煥
	副査 教授	森 下	清 子
	副査 東京工業大学名誉教授	仙 田	満

## 内 容 の 要 旨

中世における都市空間構成に関する研究は主に京だけに限られ、地方の都市については殆ど研究されていない。日本三景の一つの「天橋立」を有する丹後府中の歴史・美術・宗教・文化については多く研究されているが、都市空間構成については未だ研究されていない。本研究では、室町期に雪舟によって描かれた《天橋立図》をはじめとして、名所図・都市図屏風・荘園絵図・寺社参詣曼荼羅などの絵画史料に描かれた丹後府中の景観、建築を取り上げ、それらを基に中世室町期の丹後府中の空間構成を解明することを目的とし、その結果以下の点が解明された。

《天橋立図》の発注者、制作年代、制作意図に関してはそれぞれ多くの説があるが、丹後守護一色義直か守護代延永春信の依頼により、文明十三年頃から文亀元年頃、雪舟が 62 歳～82 歳にかけて制作されたと考えられる。この時期丹後府中は一色氏の支配下にあり、都市として最も繁栄した時期でもある。《天橋立図》の制作意図としては、単に「実景」「名所」「神仏の霊場」「小京都」を描く目的ではなく、むしろそこに「軍事・政治」的要素を強く取り込もうとしたと考えられる。

実際の天橋立、府中を俯瞰したように描かれた《天橋立図》は、雪舟自らが高山からそれらを見下ろし、町並みを歩き回り、心に感じた世界観を描き込んだと考えられる。この図には、雪舟画を特徴づける作画法である「三遠法」「内部空間」「水平基準の安定」

などが見られ、空間の広がりを示していると同時に、そこに描かれた「道」や「建物」で暗示される重要な意図を示そうと考えたのではないかと考えられる。「道」は当然軍事上重要な意味を持つものであり、また府中を外部と繋ぐものである。《天橋立図》には多くの「建物」が描かれていて、殆どの屋根は水平に描かれているが、そうではないものもある。これらは「暗示的空間表現」の作画法であり、水平に描かれていない屋根は殆ど道を示していると考えられた。小字図や現地調査の結果からもこのことが確認できた。軍事的に極めて重要な道の方向性を、雪舟は《天橋立図》で屋根の向きによって暗示的に示したものと考えられる。

中世丹後国府の所在地に関しては、加佐郡説、与謝郡説の2説があるが、筆者は丹後府中の中核である籠神社周辺から大乘寺周辺まで連なっていたと推論する。国衙を単に一ヶ所に限定せず、隣接地も含め阿蘇海沿岸部全体の中で捉えるべきであると考え。国府は必ずしも条里制を持つ広い地域にあったと考える必要はなく、不連続市街であっても、機能が相互に結びついてさえいれば国府として機能出来うと考える。籠神社周辺という丹後国府の立地場所を考えた場合、多くの施設は京と結ぶ官道に沿って山麓の傾斜地の他よりも高い場所に立てられていたと推論される。

室町期の丹後府中の都市空間は、府中の中央を東西に連なる中軸道路の北側（山側）地域の中で、他よりも僅か高い場所に支配者階級である一色氏に関する人々の高級住宅街が位置し、南側（海側）に一般庶民の居住区が位置していた。すなわち、この中軸道路は支配者と被支配者を南北に分断していた。そして西の外れを抑えるように国分寺を、その背後の岩山の上には野陣が築かれ、野陣へは土橋状の道が通っていた。東の外れを抑えるように籠神社を配し、府中地区の境界を守護し、その背後の山に一色氏が構築した山城である今熊野城が、府中の都市空間のほぼ中枢部分に位置している。その間に阿蘇海沿岸の港湾・商業交易空間が広がるという構成であった。階層秩序としての身分制は中世の丹後府中においても既に存在しており、下層民（下人・所従）は府中境域のどの周縁部にも広がっていた空隙（道、河原などの空間）のどこにでも存在していたと考えられた。このことは《成相寺参詣曼荼羅》に描かれた下層民の様子や、小字名からも確認できる。

丹後府中の都市計画は二重構造を示していたと考えられる。第一は、この地が海に面し、残りの三方が山に囲まれているという天然の要害を利用した防御面に配慮した地理的特徴を重視する発想で、第二は、北の方向を生命と純潔のシンボルとしての霊場・成相寺と水源・真名井川とし、南を俗、下界、悲しみ、災難としての海方向とする南北軸と、京に通じる主要道路（官道＝山陰道の支線）を東西軸とする十字軸を持った基本都市構造概念という二重構造を持って発展していったと考えられる。この二つの軸の交差

した中央空間に府中地区のメインの寺社籠神社と官衙が建てられていた。丹後府中の都市空間を構成する主な四つの空間は、籠神社周辺、商業交易地域を構成する中野・小松周辺、霊場として有名な成相寺周辺、籠神社と並び府中のもう一つの核とされる国分寺周辺であるが、最も重要な地域は籠神社周辺である。古代から中世に至る国家権力の中間支配機関として区別される観念がこの地域には存在していた。